序

課題解決学習の研究から、必然的な展開として、発見学習の研究にとりくんでから2年目をむかえた。

昨年は発見学習を概観し、やや粗い理解ではあったが、本年はこれを具体的な場におろし昨年の基礎の上に立って発見学習のより精ちな研究をすすめた。よく言われることであるが、課題解決学習と発見学習はほとんど同じものである。しかし発見学習の場合は、みつけるものが焦点化され、学習の切り込み方がまことに鋭角的である。それだけに子どもの学習の本質的なものに迫る力があり、発見された知識は転移の可能度が高いとされている。私どもは発見学習のねらいの一つに発見的探究の態度能力の養成をあげたが、全人的な人間形成をめざす小学校の教育課程、すなわち特別活動をふくめて１２種類の教科等、すべての教育活動の場に直接的にこれを求めることは困難である。また他面、子どもは、６才児から１２才児までの変化のまことに多い発達段階にあり、一律にこの発見学習を適用することも至難なことである。この二つのことは私どもがどんな研究テーマを設定しようと、のがれられない宿命のようなものである。このようにいってしまえばそれまでだが、私どもは何とかして、この二つの難点に取り組み、少しでも発見学習の可能な範囲での一般化をはかろうと苦心した。

そこで研究の態度として理論や実践が先走りやすくなる場合、常に教育と教育学の原点にかえることを旨として発見学習の本質論に討論の花がさいた。発見学習とは何か、その目的、内容、方法などを具体的な実践をとおし、まことに地道ではあるがより精ちに把握することにつとめたのである。特に留意したのは昨年の研究を基礎にして積みあげる態度を忘れないことであった。このような研究方針のもとにようやくまとめあげたのが、研究紀要第２５集である。

なお複式学級においては発見学習の中で、論理性の考え方が学年段階に応じて、どのような変化をもつかということを社会科をとおして研究された。

発見学習研究の道は遠く、まことにけわしいことを思う。特に発見学習の変数としての子どもの発達の研究にあたろうとしたときに実感としてうけとめた。今後もこの道をより深め、発見学習の一般化のために研究をつづけたいと思っている。各方面のきたんのないご意見をいただくよう望んでやまない。

なお最後になったが、本年度の研究を進めるにあたって、金沢大学教育学部のすべての研究室のご指導をいただき、特に増永良丸先生、水越敏行先生には、教育学的な理論研究と同時に、実際面の具体的な指導を、それぞれ精力的に行なっていただいたことについて、厚くお礼を申しあげたい。

昭和４６年５月２７日

金沢大学教育学部付属小学校長

桐　元　武　一